

少子高齢化に対応した住まい

2

—課題への対応の方向性

加茂 みどり *Written by Midori Kamo*

少子高齢化への対応は、環境問題への対応と並び、わが国の大きな課題の一つである。前回より続く一連の拙稿においては、少子高齢化に伴う社会や家族の変化に対応した住まいについて、実験集合住宅NEXT21における実験を通じ、検討した内容を紹介したい。

前稿では、少子高齢化の要因と影響・少子高齢社会における家族の変容を踏まえ、今後の少子高齢社会において住宅計画が対応すべき課題を検討した。その結果、①子育て環境としての住宅の検討、②家族の個人化に対応した住宅の検討、③高齢小規模世帯に対応した住宅の検討、④子

検討の方法について

前述の6つの課題の内、①②③の3つについては、実験集合住宅NEXT21における居住実験を通じ検討した。実験集合住宅NEXT21については、ここでの詳しい説明は割愛するが、多岐にわたる実験の実施を目的として1993年に大阪ガス(株)が建設した実験住宅である。大阪ガスの社員16世帯が実際に居住し、実証実験に参加している。居住実験は5年ごとにフェーズを区切り、居住する被験者家族も入れ替わっている。

はじめに

育て・介護・家事等のサービス供給の場としての住宅の検討、⑤多様なワークスタイルに対応した住宅の検討、⑥個人のネットワークに資する住宅の検討という6つの課題を見出した。

本稿では、実験集合住宅NEXT21における居住実験を通じ、これら6つの課題に対する対応の方向性を個々に検討した結果について報告したい。誌面の都合上、検討の経緯についてあまり多くの説明をせず結論のみを述べているため、若干飛躍した印象となるかもしれないが、その点は、予めご容赦いただきたい。

検討にあたっては、そこに居住する被験者の生活や住まい方、住戸評価や住ニーズについて、数年にわたる定点調査として、アンケート調査とヒアリング調査を毎年行い、その結果について質的研究手法を援用し分析している。具体的には、アンケートやヒアリングにおける被験者の回答を内容のまとまりごとに一つのコメントとし、それぞれのコメントにはキーワードを付与して整理し、分析した。例えば次項の子育て環境としての住宅の検討においては、被験者からその居住実験期間(5年間)にわたって採集した回答を608項目のコメントに整理し、その中から育児や子供に関するコメント138項

表1 コメント分析例・「すこやかな家」リフォーム設計打ち合わせ時の調査結果

分類	キーワード	コメント
3回目調査 (1997年)	居住内	照明 広さ 照明が暗いのは、子供によくない。 広々としていて、子供にいい。テレビも遠くから見られる。
	敷地内	遊び場 自然 通路で遊べるのは、子供にいい。 緑が多く、花が咲いたり、虫がいたりすることは、子供にいい。
		安全性
敷地外	安全性	車が多い。子供を連れて歩くのが怖い。 車が多く、家の近くで子供が伸び伸びできない。
	空気 利便性	窓を開けたときの空気が悪いのは子供によくない。 交通の便がよい。お店が多い。イベントもある。デパートも楽しい。 休日何か見に行こうと思ったらすぐ行ける。子供を連れてもいい。
生活	遊び仲間	子供の友達の来客が増えた。
	近所づきあい	NEXT21内イベントは今も肯定的。あったら行く、積極的に企画するほどのつもりはない。 クリスマス会を小さな子供のいる家の人たち(6軒)でした。
		NEXT21ホールで行われたクリスマスの合唱を聞きに行った。 NEXT21内でのコミュニティには、無理なく参加しているので、楽しい。
	家事 食事	夫の家事参加は子供守り、子供をお風呂に入れる、ご飯を食べさせる、散歩させる、おむつくらい。 週に一回程度、夕食を外食する。
家族の変化	長女が幼稚園入園、朝が早くなり、夜も決まった時間に寝るようになった。 幼稚園でのことを話すようになった。 夜、父と子供が顔をあわさない日が増えた。	
リフォーム設計打ち合わせ	遊び場	ベランダは2ヶ所にあるが、1ヶ所に広いベランダがほしい。 子供にプール遊びをさせたいが、4階は日当たりのよい立体街路がない。 リビングの延長にあるのが、気に入っている。独立した子供部屋だと、結局リビングにおもちゃを持ってきて、また片付けることになる。今はおもちゃ置き場を指定できて、リビングに居ても子供が見え、扉で仕切れることもできるのがよい。
	安全性	西側台所窓にも転落防止用バーが欲しい。 (造り付けの棚の)一番低い所の高さは？子供が頭を打つかもかもしれないので、なにかクッションを張らないといけない。 (浴室と洗面の間のガラス窓は)子供が小さい間は浴室の様子がわかってよい部分もある。客は驚くが、どちらでもよい。 タオルかけは、幅広のものにして欲しい。目の高さがない方がよい。 扉は引き戸がよい。寝室の扉が風にあおられて勢よく閉まってしまう。子供がいるとあぶない。 開き戸で、ドアストッパーが付いていてもよい。 (欄間は)アクリルよりガラスの方がいいとは思っていますが、ガラスは危なくないですか。
	間仕切り	開けて連続していても個室にもできるというのがよい。大きな空間は気に入っている。今は子供が小さいからよいが、いずれは子供部屋が2室必要(長女・長男)。来客あれば、区切って泊まってもらえる。今は子供部屋を仕切って泊まってもらっている。
	室配置	子供室と広間は必ず誰かがいるから、一体的でよい(欄間の仕切りは要らない)。 いわゆる普通のマンションの対面式のような吊り戸棚があって、窓のようなものがあるのがよい。リビングの一部がキッチンになってしまっているのは嫌い。リビングからはキッチンが隠せる現状のようなのは気に入っている。
	和室	子供の寝る場所(畳スペースのような部分)がほしい。今はベッドの横の床に布団を敷いているが、冬場は冷たそう。 和室がほしい。来客の宿泊用・子供用(畳の上においておける)・ちょっと寝転がれる(妻)・ずっと畳の上で暮らしていたので、NEXT21に来て膝が痛い(妻)。
	予備室	たんす部屋が細長い部屋でよいからやはり欲しい。今も子供がたんすの横で寝ているが、たんすはたんす部屋におけた方が安心。
	室用途	ベッドは予備室において、子供は玄関横の部屋で寝かせると思う。将来は私達(夫婦)が和室で寝て、予備室・ベッドルームを子供部屋にしようと思う。
	広さ	ダイニングスペースをリビングと別にほしい。リビングを片付けなくても食事ができる方がよい。 屋に妻と子供だけで食べる時はキッチンのカウンターで済ませている。
	玄関	扉は外開きにしてほしい。靴やベビーカー等子供のものが置いてあるので、開きにくい。
	照明	照明は明るくしてほしい。子供が扉にぶつかったことがある。 子供部屋は蛍光灯にして欲しい。
	洗面	トイレは1ヶ所でもよい。今は2ヶ所にある。1つを子供用にしていた。洗面所と同じ空間なので、子供が嫌がらず、トイレトレーニングにはよかった。
	窓	子供が外を見れる低い窓もほしい。
	メンテナンス性	(壁の塗料について)クレヨンは大丈夫か？(クレヨンで絵を描いても、拭き取ることができるか？)
	空調	空調の吹き出しは向きを変えられるものがよい。子供の寝ている所に直接あたる。
家具	畳しか経験がないのだが、ダイニングはテーブルを使ってみたい。子供にテーブルは無理かもしれないが。	

目を抽出し、分析している(表1)。

④⑤⑥の3つの課題については、実験集合住宅NEXT21内に、検証に適した被験者が見出せなかったため、学識経験者、建築実務者を含むメンバーによるワークショップを通じ検討した。

子育て環境としての住宅の検討

夫婦の出生力低下の要因の一つに子育て環境が整っていないことがあげられる。住宅も

子育てに適した環境として検討されなければならない。

子育て環境としての住宅の検討に関しては、「仕事場のある家」から子育てのための「すこやかな家」へのリフォーム実験を実施し(図1)、居住者のリフォーム時のニーズ

と定点調査の結果とを合わせて分析して
 いる。その結果から、以下の知見を得ることが
 できた。

①遊び場に関しては、広さの確保、親の目が
 届く一体的空間、気軽に外遊びができるベ
 ランダ等のニーズがあり、「子供部屋とリ
 ビング」「台所とリビング」の連続性や広
 いベランダが適している。

②安全性の確保に関しては、転落・転倒・衝
 突を防止するため、段差の解消や突起物の



リフォーム前「仕事場のある家」



リフォーム後「すこやかな家」

図1 リフォーム前後の平面図



居住開始1年後



居住開始4年後

図2 「自立家族の家」家具配置図

回避、引き戸や安全柵など、場面に応じた
 ニーズがあり、場所や状況に応じた細やか
 な配慮が必要である。また、子供の年齢や
 月齢によるニーズの変化を考慮する必要性
 がある。






③子供の遊びと家族の日常生活の両立に関し
 ては、主に子供の遊びと「接客」「食事」「作
 業」の行為の両立に対するニーズがあり、
 例えば状況に応じて間仕切れる空間等が適
 している。

④その他、子供を寝かせるのに安心感のある
 畳の和室・明るい室内空間のための採光や
 照明・子供が外を見ることが出来る低い窓・
 空調の吹き出し方向を子供の寝る場所に応
 じて変更できることなど、子供の住戸内生

活に関する細かなニーズや、汚した壁の
 メンテナンス性等のニーズがある。

子供の遊びに関しては、室内に十分な遊
 び場があればそれでよいということではな
 く、子供を外気の中で遊ばせたいことから、
 住宅と外部空間の関係性に対するニーズが
 浮かび上がった。近年都心部では、超高層住
 宅の建設が盛んであるが、ベランダがなく、
 気軽に外気に触れることすら難しい住宅が、
 子供を育てる環境として好ましいとは限ら
 ないことがわかる。安全性の確保に関しては、
 細やかな配慮が必要である一方で、子供の
 成長に合わせて、その内容が徐々に変化し
 ている。このような配慮が、必ずしも恒常的
 な対応である必然性はないと考えられる。

表2 調査結果から抽出された空間配列

	平面上的アクセス	空間配列
リフォーム前	ケース① 	1・2回目調査より 「個人」 「家族」 「社会」 玄関からアクセスし、 各自の個室を持つ。
	ケース② 	2回目調査より 「社会」 「社会」 • 「個人」 「家族」 玄関からのアクセスと 個室からのアクセスを 使い分ける。
	ケース③ 	1回目調査より 「社会」 「個人」 個室からアクセスする (妻の妹)。
リフォーム後	ケース④ 	3・4・5回目調査より 「社会」 「家族」 玄関からアクセスし、 各自の個室を持たない。
	ケース⑤ 	3・4・5回目調査より 「社会」 「社会」 • 「個人」 「家族」 玄関からのアクセスと 個室からのアクセスを 使い分ける。 (個人の来客時など)

家族の「個人化」に 対応した住宅の検討

家族の変容として、多様化と並び個人化があげられる。「個人単位で家族的現象をみる見かた」は家族社会学において家族を認識するパラダイムの変換とまで言われており、変化の方向としては定着していると考えられる。このような変容に対応し、家族の個人化に対応した住宅の検討が必要である。

家族の「個人化」に対応した住宅の検討に
関しては、自立した家族のライフスタイルに
対応した住宅として設計された「自立家族の

家」を対象とし、「社会」―「個人」―「家族」という住宅の空間配列と家族の生活の適合を検証することを通じ、検討を行った(図2)。その結果、次の知見を得た。

- ① 「社会」―「個人」―「家族」の空間配列は「個人化」した家族の生活に適合している。
- ② 一方で実際の家族は、「個人化」しているとしてもその程度は様々であり、家族構成員により適合する空間配列に違いがある。
- ③ 「個人化」を志向する家族であっても、玄関や接客空間に対する家族としてのニーズがなくなるわけではない。

同じ家族であっても個人によって、または

状況によって、生活が異なる可能性があることが推測され、それぞれの多様な生活への対応も考慮されるべきである。

また、これらの結果を受け、新たに設計した「次世代〈家族〉の家」におけるリフォームを対象とした分析(表2)から、住宅における「家族」・「個人」・「社会」の多様な関係性を実現するためには、

- ① 当該家族に適合した空間配列の選択性
- ② 居住過程における必要に応じた空間配列の変更可能性

が必要であることが確認できた。

そのためには、複数の出入り口の確保など、

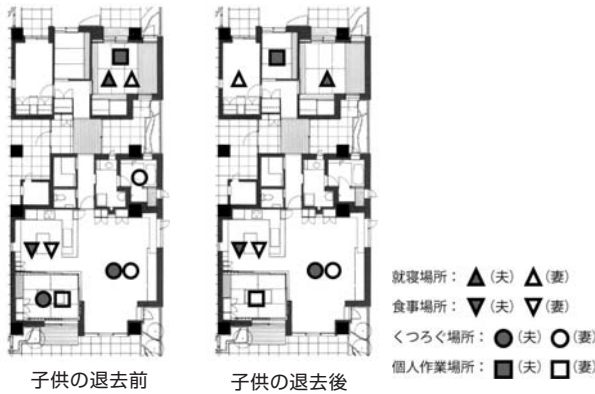


図3 夫と妻の生活行為を行う場所

単に間取り変更が可能であるという以上の工夫が必要となる。今後は空間配列の選択や変更を可能とするための可変性について、どのように実現していくのかを検討する必要がある。

高齢小規模世帯に 対応した住宅の検討

高齢化が進行するだけでなく、高齢の単身・夫婦のみ世帯の増加が顕著である。また、子供が独立した後の夫婦、いわゆる「エンブティ・ネスト」の期間が20年を超えるほどに長期化している。このような顕著に増加または長期化する家族構成の世帯に対応した住宅の検討が必要である。

高齢小規模世帯に対応した住宅に関しては、世帯主年齢が50歳代後半から60歳代初めにかけての夫婦の、2人の子供が家を退去する前後の生活を比較し、検討した結果、次の知見を得た(図3)。

- ① 子供独立後は、家全体が夫婦のプライベートな空間となる。
- ② 一方で、空間に余裕ができ、夫婦それぞれの「パーソナル」な空間・スペースがあちこちに見られるようになる。

③ リビングは夫婦のプライベートなくつろぎの空間であると同時に、プライベートな来客とともに楽しむ多機能な空間として重要性を増し、独立した接客室のニーズは低下する。子供のいる核家族から「エンブティ・ネスト」期への移行に伴い、住宅全体を夫婦2人のプライベートな空間として仕立てる必要があり、特にリビングはくつろぎの空間として重要視されること明らかとなった。同時に、2人それぞれのパersonalな空間も見出しやすい住宅が必要である。独立した接客室のニーズは低下し、リビング空間は接客空間も兼ねる多機能な室であることが望まれることもわかった。

子育て・介護・家事等の サービス供給の場としての 住宅の検討

介護サービスに対する需要の大きな増加が予測できる。介護までには必要がなくなるとも、家事

やちよつとした作業等をサービスに頼る層も増加すると考えられる。また、子育て環境の整備・就労と子育ての両立という視点からも、子育てサービスに対するニーズに対応することが必要である。このようなサービスの供給の場としての住宅の検討が必要である。

- ① 介護・家事・育児等のサービスを受け入れるためのサービス空間とサービス動線の確保。
- ② サービス供給とプライバシー確保の両立。
- ③ 個別サービスと地域の見守りサービスへの対応。
- ④ 「まち」に住むという視点から、従来の概念にとらわれずに住戸の範囲を考える。

これらより、サービス供給と本人や家族・同居住者のプライバシーやセキュリティといった日常生活のニーズを両立させ、個人が自分に必要なサービスを、自分に必要な条件の下で選択できる住宅を「まち」との兼ね合いで考えることが必要だと考えられる。

多様なワークスタイルに 対応した住宅の検討

夫婦の出生力低下の要因として、共働き世帯が増加しているにも拘わらず、就労と子育て

てが両立しにくいことがあげられる。夫婦2人が共に子育てに参加するワークライフバランスのとれた生活のための住宅の検討が必要である。

ワークシヨップの結果、多様なワークスタイルに対応した住宅について、以下の検討項目があるとの結論を得た。

- ① S O H O・職住近接等多様なワークスタイルへの対応。
- ② 仕事とプライベート確保の両立。
- ③ ワークライフバランスの確保。

これらより、多様なワークスタイルに対応するとともに、本人や家族・同居住者のプライベートやセキュリティといった日常生活のニーズと仕事を両立させ、ワークライフバランスのとれた生活を送ることができる住宅が必要だと考えられる。

個人のネットワークに資する住宅の検討

単身者や複数世帯の共同居住など必ずしも血縁によらない家族、家族の分散居住やネットワーク居住など、家族は個人を取り巻く多様なネットワークの一つとなっている。このような個人の多様なネットワークをつくりやすいしくみとしての住宅の検討が必要である。ワークシヨップの結果、個人のネットワ

ークに資する住宅について、次の検討項目があるとの結論を得た。

- ① 個人のそれぞれに違う距離感への対応。
- ② ニーズやライフスタイルの違いに対する調整手法の確保。
- ③ 住戸の範囲を超えた交流が実現するしくみを空間に組み込む。
- ④ 多世代が相互に生活を補完しながら共に暮らすことができるしくみをつくる。

これらより、世代や世帯を超える他者と、距離感やニーズ、ライフスタイルの違いを調整しつつ交流でき、生活を相互に補完することもできる住宅が望ましいと考えられる。

おわりに

本稿では、前稿にて抽出した少子高齢社会において住宅計画が対応すべき6つの課題について、それぞれ個別に検討した結果を報告した。今回は、6つの課題を抽出したが、もちろん、これが課題のすべてというわけではないだろう。少子高齢社会に対応した住まいを考える上で、まずは設定できる課題を抽出し、検討を進めたところ理解いただきたい。また一つ一つの課題についても、まだまだ検討の途上である。特にワークシヨップを通じて行った検討については、居住実験を実施していないこともあり、未だ方向性が抽象的に

留まっている。今後、もう少し具体的な検討を進めたい。

次稿では、本稿の結果を総括し、それを踏まえ実験集合住宅NEXT21において実施した住戸提案を紹介したい。

(大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 主任研究員)

CEL

参考文献

- 加茂みどり、高田光雄、安枝英俊「少子高齢社会における住宅計画の検討課題」第3回住宅系論文報告集、日本建築学会、97～106頁、2008・12
- 土井脩史、高田光雄、安枝英俊、加茂みどり「居住支援サービスに対応した居住空間における水廻り設備の設置位置に関する考察―実験集合住宅NEXT21「インフィル・ラボClass Club」を対象として―」第3回住宅系論文報告集、日本建築学会、107～114頁、2008・12
- 加茂みどり、高田光雄「個人化」に対応した住戸の空間配列と生活の適合性に関する研究―実験集合住宅NEXT21における居住実験を通じて―日本建築学会計画系論文集、第599号、13～19頁、2005・10
- 加茂みどり、高田光雄「乳幼児期の子育てに起因するリフォームニーズ―S―型集合住宅におけるリフォームに関する研究―その1―」日本建築学会計画系論文集、第599号、25～32頁、2006・1
- 加茂みどり、高田光雄「「エンフティ・ネスト」期への移行に伴う住まい方と住―ニーズの変化に関する居住実験―実験集合住宅NEXT21「安らぎの家」を対象として―」日本建築学会計画系論文集、第621号、1～8頁、2007・11
- 加茂みどり、高田光雄「住戸の空間配列の変更可能性に関する研究―実験集合住宅NEXT21における居住実験を通じて―その2―」日本建築学会計画系論文集、第635号、9～16頁、2009・1